

大学教育におけるアクティブ・ラーニングを 導入した音楽鑑賞授業の一試論

—ワークシートを活用した《Eine kleine Nachtmusik》の教材化—

伊 藤 誠 埼玉大学教育学部芸術講座音楽分野

キーワード：アクティブ・ラーニング、鑑賞教育、ワークシート、知覚と感受、深い学び

1. はじめに

本論文は、学習指導要領改訂のポイントとアクティブ・ラーニングの関係性に着目して、小学校高学年あるいは中学生を対象とした鑑賞授業のあり方（一試論に過ぎないが）について述べるものである。論述するにあたり、教科音楽の文脈（＝教科としての特殊性）のなかで、身に付けていく力の育成に向けて、今次改訂の大きな特徴である「何を理解しているか」「（理解したことを踏まえて）何ができるようになるか」といった子どもの立場を重視する鑑賞指導ができれば、アクティブ・ラーニングの成果が出せるのではないかという仮説を立ててみた。

この視点に則って、筆者が担当する本年1月7日の「初等音楽科指導法」（学部2年次生の必修科目¹⁾）において、音楽鑑賞の模擬授業を試みた。教材として、W. A. モーツァルトが作曲した《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》から第4楽章を選択した。授業では、8つの質問から構成したワークシートを配付し、各質問事項に回答させながら、数回の部分視聴を経て全曲視聴へとつなげた（詳細は第3項にて述べる）。第3限及び第4限とも、同じ内容で授業を実施し、この日の両授業の出席者数に相当する、計119枚のワークシートを回収した。その集計作業とデータ分析から考察・検討を行うことで、子どもたちに求められる資質・能力を育むために必要な学びのあり方、本稿の趣旨からいえば“鑑賞”という言葉が持つ意味を踏まえた芸術作品の聴き方や味わう方法について提言を試みたい。

2. 鑑賞授業の改善につながるアクティブ・ラーニングの視点

アクティブ・ラーニングとは、そもそも何であろうか。「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」（川池：2016）という定義づけがあるように、元来は児童生徒が学習に臨む姿勢を指している用語であって、教師が教える方法論を追究するという意味は含まれていない。アクティブ・ラーニングについては、その起源を辿ると2012年8月、中央教育審議会で取りまとめられた「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」（答申）に遡る。全30頁からなる文書のなかから、「4. 求められる学士課程教育の質的転換」の8行目～12行目を、以下に引用する。

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的

に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。

この文言からアクティブ・ラーニングとは、当初は大学教育を見直す際に使用されたキーワードだったことが分かる（夏目：2017）。大学では、大講義室等で一斉教授の形態による授業が行われることが多いため、学びに対する学生の主体性が育たないという現状を危惧して発せられた用語と考えられる。しかしこの発想が、なぜか近年の教育業界において“一人歩き”をした事実も否定できない。この記事に触れたとき、100名近くの学生を対象に、毎年度開講している「初等音楽科指導法」のことが脳裏をかすめた。この授業のシラバスにある「授業の方法・事前準備学修・事後展開学修」の欄に、筆者は“できるだけ実際の「音（音楽）」を味わってもらいながら本講義を進める”と明記した。幸いにも音楽科では、教科の特殊性から音を媒介にしながら音楽を通して理解を深めさせる場面が多い。“講義”に終始する授業はしていないつもりと自負する反面、果たしてこの授業に対する学生たちの印象はどうであろうか。残念なことに、毎年度（前期・後期とも最終回）に実施される「授業評価」においては、それを如実に証明してくれる質問は用意されていない。

周知の通り、音楽科における4つの活動領域のうち、「鑑賞」は聴取自体が子どもの心の中で行われるため、聴き取っている状況を外見から確認・把握することが困難な活動である。今回、筆者自らが“教え方”を学ぶというスタンスに立ち、アクティブ・ラーニング本来の趣旨を踏まえた音楽鑑賞のあり方を問い直してみたいと思う。具体的には、新学習指導要領（平成29年3月改訂）の教科目標に掲げられた、育成を目指すための資質・能力の骨格ともいえる「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」という3つの柱を意識した指導計画を立案することにした。

言うまでもなく、鑑賞活動は音楽を自分の耳でとらえ、感性を働かせることがすべてである。「音楽は、瞬時に消え去ってしまう「音」という媒体によって、独自の時間的流れを形成している。音楽特有の美しさを楽しむためには、音楽に対して、鑑賞者の自発的な意志の働きかけが必要であり、音楽の時間的流れに即して、聴覚を中心とした心的活動の活性化が不可欠となる。」（寺田：2018）という文言は、鑑賞指導の心得として大切な示唆を与えてくれる。さらに新学習指導要領の趣旨を理解し、授業実践につなげるための3つの柱（上述）にも相通じるものを窺い知ることができる。すなわち、音楽の何を聴き取ればよいか、その曲を形づくっている要素の働きに注目し“聴き深め”の手がかりを得ること（知識）、時間的な流れに身を委ねつつ、その要素が曲全体にどのように機能し、それが曲の構成にどう生かされているかを考えること（思考・判断）、そして主体的な心的活動により美的享受を体験することで、音楽が人生にとって価値のあるものであることを自覚すること（学びに向かう力）、以上のように解釈できるのではないだろうか。

3. 初等音楽科指導法で実施した「鑑賞」模擬授業の実際

3-1 教材選択の理由

本年度第3・第4ターム（いわゆる後期）に開講した初等音楽科指導法を履修した学生の内訳は、3限目が理系（算数、理科）40名、実技系（体育）13名、特別支援教育コース22名及び中学校コース（主に美術）4名と教職大学院の学生1名、4限目が文系（社会、家庭、ものづくりと情報）

50名、実技系（図画工作）10名及び中学校コース（主に英語）8名であった²⁾。

《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》から第4楽章を教材に選んだ理由は、おそらく過半数の学生が日頃クラシック音楽を聴くことはないであろうと予想して、ロンド形式の作品が比較的聴きやすいのではないかと判断したからである³⁾。筆者自身、コンサートでこの作品を演奏した経験があり、演奏する立場からも曲の魅力（よさや美しさ）を十分に感じている。ロンド主題が何度も繰り返されるうちに、時に音高やリズム、フレーズの長さ等にわずかな変化が起きている。さらに展開部冒頭には意表をつく転調も含まれており、決して単純なロンド形式の作品とは言えない。その一方で副主題は一つしかなく、一貫してエコノミックな手法で仕上げられている。言うなれば、このような特徴こそが、この名曲の醍醐味を覚えるポイントではないだろうか。クラシック音楽にあまり触れることのない若い世代に、芸術作品たる所以を理解し味わってほしいと思ったのである。

図1 第4楽章の1頁目（冒頭～34小節目まで）

A photograph of a handwritten musical score for the first page of the 4th movement of Beethoven's 'Agnus Dei'. The score is written on ten staves, showing various musical notations including notes, rests, and dynamic markings. The handwriting is in black ink on aged paper. The score begins with a treble clef and a key signature of one sharp (F#). The notation is dense and includes many slurs and accents, indicating a complex and expressive piece of music.

3-2 指導のポイント

実施した模擬授業では、いろいろな展開場面を想定して、特に以下の3点に留意した。

(1) 指導のねらいを焦点化したこと

「できる」「わかる」を積み重ねていくことが大切と考える。その一つひとつのステップを達成しながら、最終到達点の“本時のねらい”へとリンクさせるよう構成した。

(2) 発問の工夫をしたこと

発問の内容を手がかりにして音楽に集中することで、「かんがみる（鑑みる）」と「めぐる（賞

でる)」ことが各自のなかで行われる。主体的な関わりを通して、知覚と感受をもとに音楽を味わわせることが肝要ではないだろうか。

(3) 教材提示の方法にこだわったこと

演奏音源 (CD)⁴⁾のデータを、一旦HDDにコピーしMusic-CDにダビングする際、授業展開に応じて、すみやかに必要なフレーズ (区切り) の頭出しができるようトラック編集 (録画映像ではチャプターマークという) を施した。これによりロンド主題に9、副主題に4、Codaに1、計14箇所の頭出しが瞬時にできるようにした。

3-3 指導の展開 (ワークシートの活用と板書計画)

模擬授業は、おおよそ以下の手順で進行した。

1. 本日の授業は、鑑賞の模擬授業であること、及び鑑賞教材の曲名を発表した。
2. ワークシートを配付し、本時の内容とねらいを説明した。
3. 記入するうえで「一度書いたことはそのまま残す (答えが間違っている、修正したり加筆したりしない) こと」を確認させた。
4. ①の質問から順に回答させたが、特に②でこの曲のロンド主題 (8小節の旋律) を“ラララ……”で数回歌わせ、この主なふしを頭にインプットさせた。
5. AとA'の違いを入念に説明したうえで、②、④、⑥の部分視聴にチャレンジさせた。
6. 特に④の質問では回答のばらつきを予想して、筆者が“学生の立場”で、主題があらわれたところを一つ一つ指を折りながら、正解に向けて数え方の模範例を示した (筆者自身、音楽を流す間は、いっさい口を開かないよう心がけた)。
7. ⑤は、何か気付いた場合のみ記入するようにうながした。「迷った理由」がわからなければ、無理に回答する必要はないことを伝えた。
8. 全体視聴は、質問⑦で行った。この質問も全曲 (約5分半) の中で、ロンド主題が何回聴かれるかを問う内容であった。しかし答え合わせは6.の方法をとらず、ここでは図式化した楽曲構造 (図2) を板書したのちに、音楽の進行とともにマグネットを移動させる方法で答え合わせを行った。曲全体の構造を踏まえながら“現在の視聴部分”を味わうことの方が、主題の回数の正しい回答を求めることよりも、筆者にとっては大切だと考える (したがって、②、④、⑥、⑦の4つの質問に対する正解率よりも、⑧の結果を重視したい)。
9. 第2項に記載した「音楽は、瞬時に消え去ってしまう「音」という媒体によって、独自の時間的流れを形成している。……」という時間芸術の特徴をもつ音楽の鑑賞の仕方を、試案の形ではあるが実践したこと、そして「ロンド形式」について簡潔に説明した。ロンド形式

図2 板書計画のための覚え書き⁵⁾

前半		後半	
1) T	G ²	7) T	E ^b
2) 他		8) 他	
3) T	D~	9) T	G~
4) T	G ²	10) T	E ^b
5) 他		11) 他	
6) T	D~	12) T	G~
~ (4ヶ所)は 旋律が引継ぎされた ことを表している □ (3ヶ所)は 原調で8小節のロンド 主題が最初の形のまま あらわれている所		13) T	G
		14) Coda	

を理解できたかどうかを問う質問⑧を回答させることで、本授業を締めくくった。

今回の模擬授業を顧みて思うことは、「ワークシートの作成」に多くの時間を費やしたことである。当日の授業に臨むにあたり、大学院の「音楽教育学演習」という授業でリハーサルを兼ねて実践し、院生からの率直な意見を聞くなどして、数回の書き直しを行った。「ワークシートの意義は、まず学習の流れ、授業の手順が明確になることですね。教師と生徒が互いに授業の見通しをもてる。」「ワークシートを見ればその先生の授業がわかる。」(清水、小作:2018)という言葉が印象に残る。知覚と感受の場面を想定しながら、活動を学びにつなげる意味で、ワークシートの存在は大きい。復誦するが「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」へ導くためにも、アクティブ・ラーニングの実現と、“授業の道標”として必要不可欠なツールであるワークシートの間には、深い連関性があると言えよう。ワークシートは、鑑賞中の頭や心の動きの記録(そのときの思いや音楽の可視化)として残るだけでなく、授業後にはアクティブ・ラーニングによる授業改善を図るための基礎資料となる。次項では、学生から回収した119枚のワークシートの分析と考察を通して、授業の成果と課題について述べたい。

4. ワークシートの集計と分析

今回のワークシート(図3)は、2回の部分視聴及び1回の全曲視聴の間に「ロンド主題が何回あらわれたか」についてその回数を数えるという、ある意味単純な質問を中心に作成した。ワークシートのねらいは「音楽の仕組み」を学習させるという、その一点に尽きる。音楽の仕組みを理解するには、音楽を形づくっている要素の働きを知覚しなければならない。いろいろな教材や活動を通して行われる授業の積み重ねによって、子どもたちは、初めて音楽作品の仕組みを理解するとともに音楽自体を感受するのである。育まれた「知性」が、融合・連動して「感性」が働き、仕組みの理解へと導かれるのではないだろうか。しかし119のデータから、さまざまな“聴き取り”の実態が浮き彫りになった。分析の結果と合わせて考察を試みたい。

(1) ①と③の関連について、及び⑦の結果との相関性について。

「①日常、クラシック音楽を聴く機会があるか」という質問に対して、「よくある」(6名)、「時々ある」(26名)と答えた32名(全体の約27%にあたる)のうち、8名(25%)は「③この曲を聞いたことがあるか」の質問に「ある」と回答している。それに対して、①で「あまりない」(41名)と「まったくない」(46名)を選んだ87名は、わずか7名(8%)しか、この曲を聞いたことがないと回答した。そして、⑦「全曲視聴を通して、AとA'が合わせて何回演奏されているか」に対しては、①の4つの選択肢「よくある」「時々ある」「あまりない」「まったくない」の順に、その正解率は66.7%、53.8%、48.8%、47.8%となっており、日頃のクラシック音楽の視聴頻度が高いほど、正解率も上がることが分かった。

(2) 4名の学生が「⑧ロンド形式を理解できたか」に対して「いいえ」と回答した。

残念な結果であるが、119名のなかで4名が「⑧ロンド形式を理解できたか」の質問に「いいえ」と回答した。つまり、この授業のねらい自体が理解できなかったということだろう。その原因はどこにあったのか、今回のワークシートには、その理由を聞く質問を用意しなかった。しかし不可解なことが一つある。④⑥⑦の質問に対して、4名とも④と⑥では正解しているのである。確かに⑦の回答には(正解は「11」であるが)それぞれ6、8、9、9と誤った回答をしている。

図3 鑑賞授業ワークシート

平成31年1月7日

学籍番号： _____ 名前： _____

●初等音楽科指導法：鑑賞授業 ワークシート

注意……一度書いたことは、書き直したり（書き加えたり）しないように。「その段階での記録や結果」が大切だからですね。

本時の題材……ロンド形式について学ぼう

鑑賞教材：Mozart作曲「アイネ・クライネ・ナハトムジーク（Eine Kleine Nachtmusik）」から 第4楽章（終楽章）

- ① 日常、クラシック音楽を聴く機会はありますか。
() よくある () 時々ある () あまりない () まったくない
- ② 曲の冒頭（15秒ほど）を流します。
☞ この8小節のメロディラインを“ラララ”で歌っておきましょう。短いメロディですから覚えて下さい。
- ③ この曲ですが、どこかで聞いたことはありますか。 () ある () ない
- ④ この作品の前半（1分30秒ほど）を鑑賞します。今聴いた（そして歌った）メロディが何回出てくるか、心の中で数えて下さい。聴き終わったら答え合わせをしましょう。まず「自分の答え」の方に答えて下さい。

自分の答え…… () 回 正解…… () 回

*この旋律を「主なふし」と呼ぶことにします。これを「A」と表わすことにします。

しかし、答えを書くのに少し迷った人もいたと思います。もう一度同じ部分を流しますので、私とともに「正解」を確認しましょう。

- ⑤ 伊藤も“戸惑う素振り”を見せましたが、その原因は何だと思えますか。気付いた人は“その迷った理由”を書いて下さい。

*若干の違いがあったため、この部分は「A」ではなく、「A'」と表わすことにします。

- ⑥ 今度は、この作品の後半部分（1分45秒ほど）を流します。「主なふし」（AおよびA'）が合わせて何回あらわれるでしょうか。心の中で数えて下さい。②でも触れましたが、「A」に対して若干の違いがあると感じた場合は、それを「A'」としてカウントして下さい。

自分の答え…… () 回 正解…… () 回

- ⑦ いよいよ全曲（5分30秒ほど）を通して鑑賞します。全体を通してAとA'が合わせて何回演奏されるのでしょうか。聴き終わったら答え合わせをしましょう。

自分の答え…… () 回 正解…… () 回

まとめ……この作品は、AやA'とはまったく異なるメロディを挟みながら、主なふしであるAとA'が何回も繰り返し演奏されます。このような構造によって作られている曲を「ロンド形式によって作曲されている」と言います。

*さて“ロンド”とはどういう意味をもつ言葉でしょうか。

ある音楽辞典では、以下のように説明されていました。

Rondo（イタリア語）……音楽形式の一つ。ABACABAのように、反復される主題部（A）とその間を埋める挿入部（BやC）の交替によってできている作品のこと。古典派時代には、交響曲やソナタなどの最終楽章に好んで用いられた。

⑧ 本日の授業のねらいである「ロンド形式」について、理解することができましたか。
() はい () いいえ

理由はそれだけだろうか、あるいは己に厳しく一つでも間違えば、その時点で「いいえ」と回答しなければならなかったのか、筆者としては気になるところである。

(3) 3つの質問(④⑥⑦)の回答がパーフェクトだった21名の学生⁶⁾について。

全問正解だった21名(全体の18%)が、特に“優れた学生”だったというわけではない。例えば、①の質問について「よくある」「時々ある」を選んだ学生は、合わせても7名に過ぎない。③の質問で、この曲を「聞いたことがある」学生は3名、⑤では3名が無回答である。この結果から、主題の回数を正確に導き出すことと、クラシック音楽の聴取頻度との間には、何ら密接な関係性は存在しないことが分かる。

(4) ⑤の自由回答、その記述内容の内訳をめぐって。

この質問に対する無回答の分布は、「①日常、クラシック音楽を聴く機会があるか」の聴取頻度の多い順から1、4、14、18(計37名で、全体の約31%にあたる)であった。無回答の割合であるが、「よく聴く」「時々聴く」が5名(1+4)で15.6%だったのに対して「あまり聴かない」「まったく聴かない」は32名(14+18)で36.8%であった。ほぼ納得できる結果である。

AとA'の違いが記述された回答内容から、それを6つのカテゴリー(旋律、リズム、調、音高、速度、その他)に分類した。複数回答は13名、一つだけの回答は68名であった。上記6つの要素のうち、調の変化に気付いた学生は23名⁷⁾を数えた。意外だったのは、全問正解が叶わなかった98名のなかで、何らかの理由を書いた63名のうち「調の変化」に気付いた学生が15名もいたことである。なお、19名の学生が意味不明な内容、あるいは明らかに間違った回答をしていた。

(5) 「主題を聴き取る」こと自体の意味が、果たして理解されていたのだろうか。

3つの質問(④⑥⑦)とも、意見(主題の回数)が分かるであろうことは予想していた。しかし、少しずつ不正解の“種類”は少なくなるだろうと考えていた。確かに、④のときは不正解が7つもあり、かなり回答が拡散したが、⑥ではそれが5つに減少した。ところが⑦では、不正解が9つに広がってしまった。

8小節の主題を抜き出すという意味を、そもそも学生たちは理解していたのだろうか。事実、④が不正解だった41名のうち、⑥もしくは⑦で正しい答えを出していたのは、わずか9名(22%)に過ぎない。

今回の模擬授業で得た119のデータ分析から、3つの課題(反省点)を述べておきたい。

- ・すでに(2)で触れたように、「⑧ロンド形式を理解できたか」に対して「いいえ」と回答する学生があらわれることを事前に想定して、「なぜ理解できなかったのか」について簡潔に書いてもらう設問を用意すべきであった。
- ・3つの質問(④⑥⑦)正解率の推移に、再度注目したい。④の質問で曲の提示部の、繰り返し後の主題経過部(15小節目)までを聴かせ、⑥では展開部のみ、繰り返し後の83小節目までを聴かせた。つまり⑦の全体視聴に入るまでに、前半部分で「5回」、後半部分で「4回」の答え合わせを済ませている。全体視聴といっても、⑦ではじめて聴取させた部分はわずかである。だとすると、⑦だけの、全体視聴の正解の数が高くなってよいのではないだろうか。平凡な正解率に終わった原因は何だったのだろうか。

- ・授業後に「クラシック音楽のよさや美しさを味わうための唯一の方法は、曲の主題（主なふし）を正しく数えることである。」などと誤解してしまう学生がいるのではないか、という不安を覚えた。作品を形づくる諸要素の働きを理解することは鑑賞の能力を磨くうえで大切であるが、それが唯一“正しい鑑賞の仕方”であるかどうかは、まったく別の問題だからである。

5. 結びにかえて—音楽鑑賞に必要な美的享受を伴う“深い学び”の重要性—

「主題」に集中させつつ、作品の全体像（曲の構成・形式）を理解させるねらいで実施した模擬授業であったが、全体視聴での正解率があまり高くなかったことに加えて、部分視聴のときよりも意見が分かれ、不正解の回答が多く出たことは予想外の結果となった。

芸術系教科においては、教授・学習過程のなかで、教え導こうとするだけでは不可能な内容があるということは周知の通りである。例えば、今回の授業で試みたように、時間の流れとともに主題が何度も回帰することに対して、“面白い”とか“美しい”という感情を持つことができた学生が何人いただろうか。音楽を形づくっている要素に反応して、学習者がそれを秩序づけたり統合したりすることができれば、それは美的享受につながる行為のあらわれと言えよう。「音の連続に“体験豊かな見方（聴き方）をする”といった精神の働きかけを試みることによって、我々は音楽の美しさを感じ取る。」（岡本：2005）という、美学的見地⁸⁾から述べられた一文に触れるとき、学習に対する姿勢そのものを指すアクティブ・ラーニングの真意が想起される。

主題のメロディが頭に入っていなければ、テーマとそれ以外の部分との聴き分けができない。あるいはAとA'の違いを感じながら、音楽の微妙な“揺れ”を感じ取ることもできない。そして第4楽章の構成美を視野に入れながら、作曲者が作品に“仕掛けた妙”を味わって聴くこともできないだろう。学生たちのこのような主体的聴取を期待して行った授業であったが、ワークシートの回答に、満足のいく展開を裏付ける記録は残らなかった。上述の「体験豊かな見方（聴き方）ができる」ためには、教える側にどのような努力が求められるのだろうか。

新学習指導要領・音楽科の目標には、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力の育成について謳われている。この「体験豊かな見方（聴き方）ができる」ことを目指し「学びに向かう力や人間性等」に関わる課題を少しでも解決に向かわせるためには、教師の音楽的専門性と相まって、長く培われた故に築かれる教師の芸術観（人柄や個性とともに）が、授業のなかに滲み出るかどうかにかかっているのではないだろうか。日々の授業で育成される音楽的資質や能力が、生活のなかで活用できる力として機能するためには、教育に“一定の時間”が必要なのである。

音楽の聴き方を学習するための深い学びと、課題と向き合い解決しようとするアクティブ・ラーニングの精神が寄り添うことで、生きて働く知識や感性がはじめて獲得されるのである。第2項で述べた3つの学びを俯瞰する視点で、今後も芸術の本質に迫る授業を目指したい。「音楽科はアクティブな活動が前提で成り立っているが、だからといってアクティブ・ラーニングが成立していることにはならない」（川池：2012）のである。深い学びの実現に向けて、この教えを心に刻みたい。

注

- 1) 初等音楽科指導法は、教育学部小学校コースに在籍する2年次生（養護教諭養成課程を除く）の必修科目である。加えて中学校コースの学生（芸術専修音楽分野以外の他分野も対象である）が1種（あるいは2種）の小学校免許状取得を希望する場合は、必ず履修することが求められる。毎年度、前期と後期それぞれ2本ずつを開講している。
- 2) 小学校コースの芸術専修音楽分野の2年次生は、専修別の組み分けによって、すでに第1・第2ターム（いわゆる前期）の授業で履修を終えている。同じ理由により、中学校コースの音楽分野の学生も履修済みである。
- 3) ロンド形式は、一般的に交響曲やソナタ等の最終楽章に好んで用いられた。モーツァルト自身も、この作品の自筆譜に「Rondo」と書き込んでいる（図1：自筆譜ファクシミリ左上に明記されている）。8小節からなる主題は、二度の副主題の挿入で中断されるものの、全曲を通して何度も繰り返し再現される。この楽章はロンド的性格を備えてはいるが、形式構造上では厳格な意味でのロンド形式ではないとして、ロンド的な特徴を持ったソナタ形式と結論づける研究者もいる（D. レックスロート：2012）。
- 4) 今回の授業で用いたCDは、ザロモン弦楽四重奏団（エンシェント室内管弦楽団のメンバー）に一人のコントラバス奏者が加わった、弦楽5部（一般的に、この編成はセレナード・クワルテットと呼ばれる）による、各パート一人ずつの珍しい古楽器による演奏である（L'Oiseau-Lyre POCL-2506）。
- 5) Gはト長調、Dはニ長調、E^bは変ホ長調である。Gに付けた「2」は、8小節の主題がリピートして提示されることを示している。「～」は（左下のメモ書きのように）主題が引き延ばされ、メロディラインや音高に変化が起きていることを表している。「他」は、副主題や推移部、あるいは終止主題の部分である。なお1）から14）は、CD編集による頭出しのためのトラック番号である。この図から、主題がト長調で7回、ニ長調で2回、変ホ長調で2回、すなわち3つの調により、主題が11回表れることが分かる。
- 6) 3つの質問に対する正解者数の推移は以下の通りである。④の正解者は78名（65.5%）、この78名のうち次の⑥も正解した者は46名、最終的に⑦の質問にも正解した者は21名であった。ただし、⑥の質問だけに正解した学生は65名（54.6%）、同様に⑦の質問だけに正解した学生は60名（50.4%でほぼ全体の半数）であった。
- 7) 全問に正解した21名のうち、⑤の質問で理由を書いた学生は18名だった。この18名の回答をみると6つのカテゴリーのうち「調の変化」を指摘した学生が8名と最も多く、以下「旋律」が7名、「音高」が5名、「リズム」が2名であった。「調の変化」に気付いた学生8名のうち、5名が「転調」という用語を使っていた。
- 8) 美学者の今道は「どのような作品の場合にも、理性的に理解するという段階がなければ、その作品の鑑賞は成立しない。」と述べている（今道：1973）。言い換えれば、人間の知的な省察が加わった場合とそうでない場合とでは、作品に接したときの美的体験の質がまったく異なるということであろう。

参考・引用文献

- EINE KLEINE NACHTMUSIK Serenade in G-Dur KV525, Faksimile der autographen Partitur, VEB *Deutscher Verlag für Musik Leipzig*, 1989
- 今道友信（1973）『美について』、講談社
- 岡本信一（2005）「音楽科教育における美的体験についての現代的位相—音楽の知の概念（人間知・暗黙知）に基づいて—」『芸術と教育』第9号、兵庫教育大学芸術教育研究誌、pp.13-21
- 小熊利明（2018）「見方・考え方を働かせ揺るぎない学びを」『季刊 音楽鑑賞教育』Vol.36 通巻540号、音楽鑑賞振興財団、pp.32-35
- 川池 聡（2017）「アクティブ・ラーニングで育つ子どもの姿」『季刊 音楽鑑賞教育』Vol.27 通巻531号、音楽鑑賞振興財団、pp.10-11
- 清水宏美、小作典子（2018）「ワークシートには授業、生徒への思いが表れる」『教育音楽（中学・高校版）』

62巻3号, 音楽之友社, pp.34-40

初等中等教育局教育課程企画室 (2017) 「主体的・対話的で深い学び—「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善—」『中等教育資料』通巻972, 学事出版, pp.10-13

寺田貴雄 (2018) 「鑑賞指導の意義—音楽へのアプローチの方法の習得—」『最新 初等科音楽教育法』音楽之友社, p.93

夏目 凜 (2017) 「2020年、次期学習指導要領—消えた「アクティブ・ラーニング」—」『Education Tomorrow』, pp.1-2 (https://edutmrrw.jp/2017/innovation/0410_2020education, 2019/02/2現在)

レックスロート, D. (2012) 『モーツァルト「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」成立と分析』(井本响二訳), シンフォニア

(2019年3月25日提出)

(2019年4月19日受理)

Investigation of a Music Appreciation Class that Introduced Active Learning in University Education:

Making Eine kleine Nachtmusik into a Teaching Tool Using a Worksheet

ITO, Makoto

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This paper focuses attention on the points of revisions to the government curriculum guidelines and their relation to active learning in a discussion of state of appreciation courses for students in upper elementary to junior high school. I aimed to realize appreciation instruction that regards the importance of the children's point of view by considering what they can grasp and what they can learn how to do, which are both important features of the latest revision, toward cultivating their ability to acquire knowledge within the context of a music class. Along with this, I also touch upon the state of university education by reflecting on the true intent of active learning.

This paper is organized as follows: *Introduction, Viewing Active Learning as Leading to Better Appreciation Classes, The Realities of a Mock Appreciation Class Implemented in the "Elementary Music Class Teaching Methods" Course, Tabulating and Analyzing Worksheets*, and instead of a conclusion —*The Importance of "Deep Learning" that Accompanies the Aesthetic Enjoyment Needed for Appreciating Music* (the original paper also includes three additional items—the first page of Mozart's original manuscript, notes for plans for blackboard writing, and a worksheet that was handed out on the day of the mock class.).

In an "Elementary Music Class Teaching Methods" class that I taught in January of this year, I carried out a mock music appreciation class using the fourth movement of Mozart's *Eine kleine Nachtmusik* as teaching material. In this class, I handed out a worksheet composed of eight questions. After playing several sections of the piece, and while leading this to a listening of the entire piece, I had the students answer each question. The 119 worksheets collected brought to light numerous states of listening comprehension. For Items #3 and #4, I analyzed the data from five standpoints, and after considering each of these, I described three challenges (points for reconsideration).

If a student cannot remember the main melody of the rondo, then they will not be able to distinguish the theme from the other sections. Through a consideration of the whole, I realized that an appreciation experience that includes aesthetic enjoyment is needed to be able to listen to and savor the skill that the composer used in the work while considering the beauty of the way the music was organized. In the end, I keenly felt the need for further research into both the process of gaining insight into a subject that cannot be expressed with language, and the stance that the teacher must personally take in pursuing the means to gain such insight.

Keywords: active learning, appreciation education, worksheet, perception and sensitivity, deep learning